北九州歴史文化遺産　第四十三回

阿南、久留島らと北九州児童文化

毎年5月5日の子供の日、大分県玖珠町を会場に日本童話祭が開かれる。同町出身の「日本のアンデルセン」久留島武彦が口演童話を始めて50年を記念し昭和25年に始まったものだが、その契機を作ったのは北九州市の詩人、童話作家、さらには到津遊園の園長等として子供たちを導いた阿南哲朗。彼を始めとして大正から昭和、さらに現代まで多くの仲間、後継が北九州を児童文化の地に育てた。

玖珠町三島公園の桃太郎像。到津遊園に立ってから83年、場所は変わっても今なお子供たちを見守り続ける。

阿南哲朗は1903年（明治36）1月、大分県竹田市で出生、本名竹千代。4歳の時、小倉に転居し幼少期から詩や童話を愛好。1920年九州電気軌道（西鉄の前身。略称：九軌）に入社して4年後には文芸雑誌「揺籃」を創刊。1932年（昭和7）、九軌が創立25周年で到津遊園を開園し阿南は企画係長として行楽客誘致だけでなく動物と触れ合える施設としての整備や、1937（昭和12）夏季林間学園の開設などを担った。

到津遊園・桃太郎像波乱

当時の九軌社長が久留島武彦と大分時代の竹馬の友だった村上巧児（後、西鉄初代社長）。久留島を林間学園長に招き、久留島は翌1938年、到津遊園に桃太郎像設置を提唱した。犬、猿、キジと力を合わせて鬼ヶ島に行った桃太郎から「あい助け、あい支え、違いを認め合う」ことの大切さを学ぶもの。

この像を巡っては後年、波乱が続いた。米英等との第2次大戦で銃砲などへの金属供出が求められ、銅製の桃太郎像も国により没収されようとした。ここで阿南が回収に来た作業員に「像は全国の子供たちの寄金で出来たもの。子供達の手で降ろしたい」と訴えて退去させた。戦後、今度は駐留米軍が「像は日本の戦争を鼓舞したものだ」として破壊しようとしたことから暗夜、引き下ろして倉庫に隠し、昭和25年に玖珠町に童話碑が建立されるのを機会に、同町に運び寄贈した。この一連のことは阿南自身が昭和44年8月の読売新聞コラムで紹介している。

阿南哲朗の提唱で出来た三島公園の童話碑

この童話碑も阿南が久留島に「あなたが口演童話を始めて50年。記念に郷里に碑を建てませんか」と提案して出来たもの。桃太郎像はその碑を見守る役割も背負わせて送り出した。今、玖珠町の旧森藩主邸跡の三島公園の童話碑のそばに立ち、子供たちを見守っている。

像は久留島の提案で大正13年（1924）、旧制大分中学時代の同級生、彫刻家渡辺長男（おさお）（朝倉文夫氏の兄）の原作。計3体造られたが神戸の林間学校や奈良の遊園地に置かれた他の2体は戦時の供出で溶かされたとみられる。

阿南哲朗氏
（北九州市立文学館所蔵）

阿南と久留島との交流はこれらの動乱の前、大正15年（1926）に遡る。当時、子供達に仏教の日曜学校で踊りや童話などを教えていた小倉・西蓮寺の住職黒田晴嵐（1899～1945）とともに大正15年小倉児童芸術協会を結成、発会式に久留島武彦を招いて講演してもらったのが始まり。阿南は後、「俳人の橋本多佳子、杉田久女らも協会世話役になって支え、この縁で橋本の住宅・櫓山荘（小倉北区中井）は野口雨情ら文人、画家らのサロンになっていった」と回想している。

林間学園開設 今に続く

到津遊園は児童文化を発信することにより沿線住民の福祉に貢献するという理念で開園。翌1933年に動物園も開き、また子供ホールの建設、音楽、劇、児童舞踊の公演など様々な催しを展開した。

そして阿南、黒田の発起によって、昭和12年（1937）久留島武彦を迎えて芸術教育夏季林間学園（現・林間学園）を開いた。北九州市立大学講師で絵本「もたろうからのてがみ」作者原賀いずみさん（61）は到津遊園研究論文で、「阿南氏は久留島から子どもたちの健康と自然に親しませるために林間学園をやったらどうかとアドバイスを受けた。彼は、林間学園創設プランは親友の黒田が創設者と記している」としている。

その林間学園は昭和35年6月（1960）の久留島没後は阿南が学園長に、さらに昭和54年（1979）8月の阿南没後は彼らを支え、また後継した蠟川内満、古村覚、本村義雄、森友忠生氏らがその使命を受け継ぎ、発展させてきた。

到津遊園は西鉄の経営悪化で平成12年（2000）に閉鎖した。しかし存続を願う多くの市民の声で同14年4月、北九州市都市整備公社運営で「到津の森公園」として再開、林間学園も続いている。

原賀さんは言う。「阿南さんをはじめ久留島、村上さんも大分の人だけど阿南さんは北九州に育てられ、皆さんがここ北九州に児童文化の拠点を作ろうとした。それを今後につなげて行くためにも、もう一度その功績を見直すことも大切ではないでしょうか」と。

シニアスタッフ　村田和夫

今回の歴史文化塾は感染予防のため中止致します。